ライオン

感染症とオーラルケアをテーマにセミナー開催

外出時間に合わせて「帰宅時の歯みがき」「口閉じ歯みがき」を提唱

ライオンは6月9日、オンラインセミナー「感染症とともに暮らす時代のオーラルケア2022」を開催し、オーラルケアマイスターの平野正徳氏が「コロナ禍における生活者のオーラルケア実態調査」、オーラルケア研究所の城隆太郎氏が「歯みがき行動と感染症予防との関係について」、ライオン歯科衛生研究所の福田真紀氏が「目的やシーンに合わせた毎日のオーラルケア行動のススメ」と題してプレゼンテーションを行った。

同社では、コロナ禍においても生活に役立つ情報を幅広く発信しており、オーラルケア分野においては、飛沫の飛散が不安な職場での歯みがき対策として「口閉じ歯みがき」、日本歯科医師会が発表した「口腔ケアで免疫力アップ（口はコロナウイルスの感染経路の1つ）」などの情報発信を行い、コロナ禍の生活でも口を清潔に保つことの重要性を訴え続けてきた。

こうした中、生活者のコロナ禍におけるオーラルケア実態を把握すべく、3月18～22日にかけて全国の16～79歳男女259名（うちコロナ罹患経験者207名）を対象に、インターネットによるアンケート調査を行った。

それによると、約7割の人（一般＝72％、コロナ罹患者＝67％）が全身健康に対するオーラルケアの重要性について、約半数の人（一般＝51％、コロナ罹患者＝44％）が感染症予防に対するオーラルケアの重要性について認知していることがわかった。また、自身または家族がコロナ罹患経験者のうち、感染症予防に対するオーラルケアの重要性を認知したきっかけは「自身または家族のコロナ罹患」であると約4割（38％）の人が回答した。

「このことから、全身健康に対するオーラルケアの重要性認知には及ばないものの、感染症予防に対するオーラルケアの重要性認知は、コロナ罹患というきっかけも含め短期間で広まりつつあるといえる」（平野氏）

新型コロナウイルス流行前と比較して歯みがき回数が増えたと答えた人の割合は、2021年（n＝2084）が8％、2022年が9％（n＝2161）となり、コロナ前と比較して歯みがき頻度はあまり変わっていなかった。また、自身または家族がコロナに罹患した場合でも、約9割の人はオーラルケア行動をほとんど変えていなかった。

「コロナ罹患経験者の約4割が、自身または家族のコロナ感染がきっかけで感染症予防に対するオーラルケアの重要性を認知したものの、情報を得ても行動変容にはつながっていないことがわかった」（平野氏）

それは、感染後に行った感染リスクを避ける行動にも表れており、トップ3は、「不要不急の外出は控える」「他の家族とは居住空間を分ける」「部屋の換気をする」となったのに対し、「歯みがきの時間・場所をずらす」「自宅以外ではうがい、歯みがきをしない」「飛沫が飛ばないよう口を閉じて行う」といったオーラルケア行動はいずれも下位にとどまった。

「コロナ罹患経験者がやっておけばよかったと思っていることの上位は『免疫力』『健康管理』『体力向上』となり、身体のケアが上位に来ているが、オーラルケアには結びついていないのが実情だ。オーラルケアと感染症予防の関係については認知していても実際の行動につながっていないことから、正しい情報を伝え続けていくことが重要だ。継続して情報発信に努めていく」（平野氏）

歯みがき行動と感染症予防との関係性について解説

続いて、城氏が「歯みがき行動と感染症予防との関係について」と題し、日常生活に取り入れやすいオーラルケア習慣について新たな提案を行った。

城氏によると、歯みがき行動はムシ歯や歯周病などの予防だけでなく、風邪などの感染症リスクを下げることにもつながる可能性があり、実際に1日の歯みがき回数が多い人ほど風邪を訴える割合（1回＝24・2％、2回＝21・5％、3回＝17・7％）が低いことがわかっている。特に、帰宅直後に歯をみがくと答えた人の風邪を訴える割合が低かった。

「風邪を訴える人に多い生活習慣として睡眠、栄養、運動の問題に加えて歯みがき回数の少なさが挙げられた。感染症リスクを下げるためにも、通常の歯みがきだけでなく、帰宅時に歯みがきをプラスすることをおすすめしたい」（城氏）

最後に福田氏が「目的やシーンに合わせた毎日のオーラルケア行動のススメ」と題し、外出時間が長めの人への「口閉じ歯みがき」の提案を行った。

「口閉じ歯みがき」は3密を避けるとともに、飛沫の飛散を防ぐのに有効であり、同社の調査（2022年、n＝2161）でも24・1％の人が実践しているという。

以上のことから、外出時間が比較的短い人は「帰宅時の歯みがき」、外出時間が比較的長い人は「口閉じ歯みがき」を取り入れることが、感染リスクを下げるうえでポイントといえそうだ。

（禁無断転載）©Ⓡ
本紙の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、堅く禁じられております。
本紙からの複写を希望される場合は、出版者著作権管理機構（JCOPY）（03-3513-6969）まで必ずご連絡下さい。

The Voice

RAPHAS JAPAN（ラパスジャパン）
代表取締役・CEO
権（グォン）有利（ユリ）氏

医療分野で活用される溶解性マイクロニードルを化粧品で展開

ラパスジャパンは、ドラッグデリバリーシステム（DDS）の一種で、医療機器・医薬品で活用されている「溶解性マイクロニードル」を用いて、浸透力と安定性に優れたマイクロニードルパッチ化粧品の製造・販売事業を展開している。

マイクロニードルパッチは現在、美容分野において認知が徐々に広がりつつあるが、元々は注射に代わる製剤として開発されたものだ。

「DDSの多くは注射による投与が一般的な方法だが、注射針による痛みや『冷蔵・冷凍』で保管・輸送するためのコールドチェーンの確保、さらには汚染された注射針による死者が年間130万人を超えるなど、医療廃棄物による環境問題もある。こうした現状の課題を解決すべく、革新的なDDSとして登場したのがマイクロニードルパッチだった」

ラパス（韓国）と米・モデルナ社ではこのほど、新型コロナワクチンパッチの研究開発をスタートした。従来の筋肉注射では、接種後の血栓症リスクが課題となっていたが、皮膚の浅い部分にゆっくりと薬剤を浸透させるマイクロニードルパッチは、従来よりも痛みがなく血栓ができにくいメリットがあるという。

「実用化については当面先の見通しだが、既に共同研究の成果として有意なデータが出てきている」

溶解性マイクロニードルは、肌内部にある水分によって溶け込む物性を持つヒアルロン酸をベースとし、コラーゲンやアスコルビン酸、ナイアシンアミドなど様々な有効成分を組み合わせたマイクロニードルパッチで肌の内側（角質層）に直接うるおいを届けるというアプローチは、これからの化粧品にますます求められていくだろう」（之）

溶解性マイクロニードルは、肌内部にある水分によって溶け込む物性を持つヒアルロン酸をベースとし、コラーゲンやアスコルビン酸、ナイアシンアミドなど様々な有効成分を浸透させるマイクロニードルパッチは、従来よりも痛みがなく血栓ができにくいメリットがあるという。

「実用化については当面先の見通しだが、既に共同研究の成果として有意なデータが出てきている」

溶解性マイクロニードルは、肌内部にある水分によって溶け込む物性を持つヒアルロン酸をベースとし、コラーゲンやアスコルビン酸、ナイアシンアミドなど様々な有効成分を組み合わせたマイクロニードルパッチで肌の内側（角質層）に直接うるおいを届けるというアプローチは、これからの化粧品にますます求められていくだろう」（之）

マイクロニードルパッチは、従来よりも痛みがなく血栓ができにくいメリットがあるという。

「実用化については当面先の見通しだが、既に共同研究の成果として有意なデータが出てきている」

溶解性マイクロニードルは、肌内部にある水分によって溶け込む物性を持つヒアルロン酸をベースとし、コラーゲンやアスコルビン酸、ナイアシンアミドなど様々な有効成分を組み合わせたマイクロニードルパッチで肌の内側（角質層）に直接うるおいを届けるというアプローチは、これからの化粧品にますます求められていくだろう」（之）

マイクロニードルパッチは、従来よりも痛みがなく血栓ができにくいメリットがあるという。

「実用化については当面先の見通しだが、既に共同研究の成果として有意なデータが出てきている」

溶解性マイクロニードルは、肌内部にある水分によって溶け込む物性を持つヒアルロン酸をベースとし、コラーゲンやアスコルビン酸、ナイアシンアミドなど様々な有効成分を組み合わせたマイクロニードルパッチで肌の内側（角質層）に直接うるおいを届けるというアプローチは、これからの化粧品にますます求められていくだろう」（之）